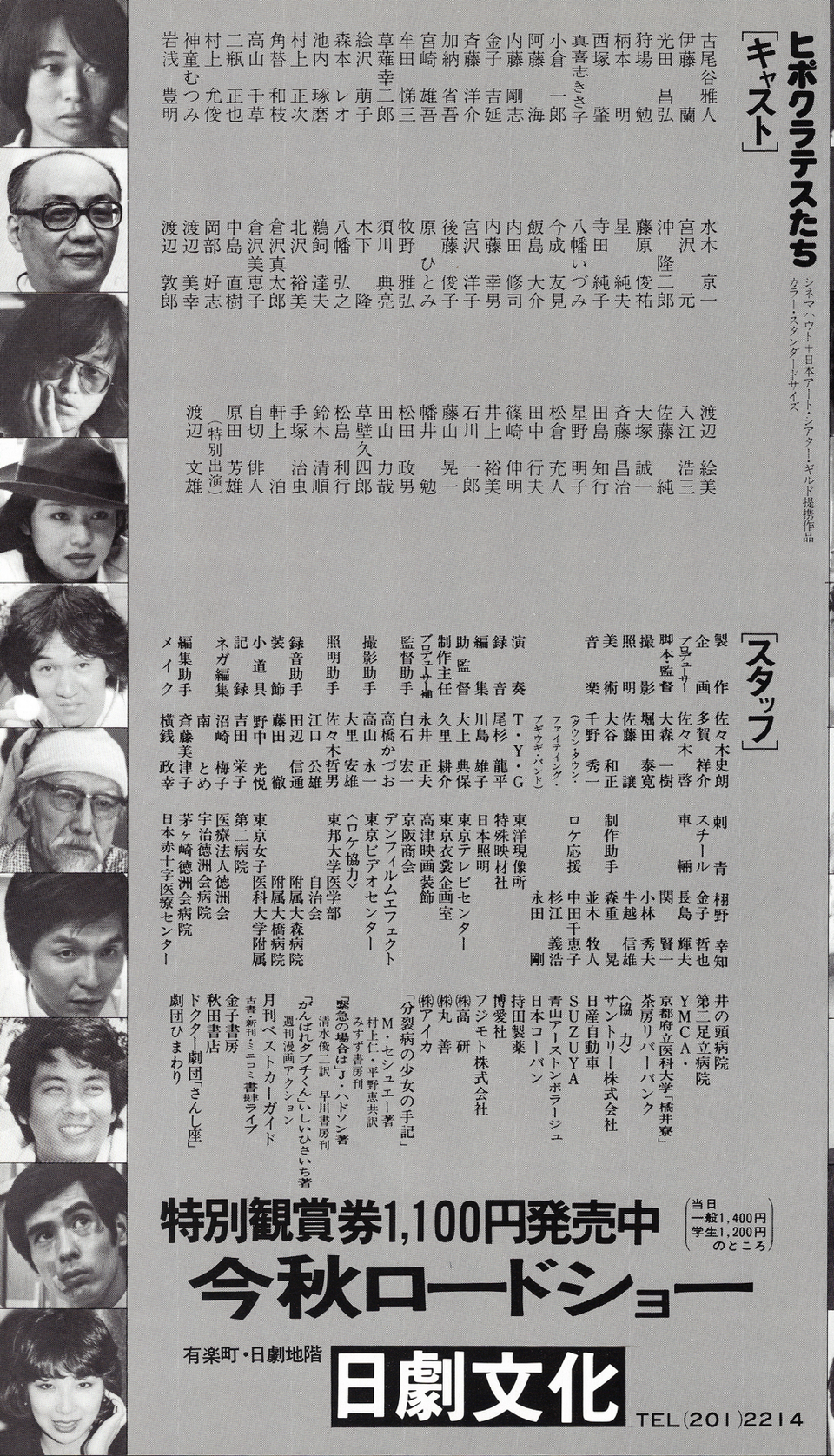


atg

シアター2

大森一樹監督作品

ヒポクラテスたち



今、彼等の青春が診察される。



［キャスト］

シネマハウト＋日本アート・シアター・ギルド提携作品
カラー・スタンダードサイズ

古尾谷雅人　伊藤　蘭　光田　昌弘　狩場　勉　柄本　明　西塚　肇　真喜志きさ子　小倉　一郎　阿藤　海　内藤　剛志　金子　吉延　斉藤　洋介　加納　省吾　宮崎　雄吾　牟田　悌三　草薙幸二郎　絵沢　萠子　森本レオ　池内　琢磨　村上　正次　角替　和枝　高山　千草　二瓶　正也　村上　允俊　神童むつみ　岩浅　豊明

水木　京一　宮沢　元　沖　隆二郎　藤原　俊祐　鵜飼　達夫　北沢　裕美　倉沢真太郎　倉沢美恵子　中島　直樹　岡部　好志　渡辺　美幸　渡辺　敦郎

渡辺　絵美　入江　浩三　佐藤　純　大塚　誠一　斉藤　昌治　田島　知行　星野　明子　松倉　充人　田中　行夫　篠崎　伸明　井上　裕美　石川　一郎　藤山　晃一　幡井　勉　松田　政男　田山　力哉　草壁久四郎　松島　利行　鈴木　清順　手塚　治虫　軒上　泊　自切　俳人　原田　芳雄　（特別出演）　渡辺　文雄

［スタッフ］

製作　佐々木史朗
企画　多賀　祥介
プロデューサー　佐々木　啓
脚本監督　大森一樹
撮影　堀田　泰寛
照明　佐藤　譲
美術　大谷　和正
音楽　千野　秀一
（タウンタウン・ファイティング・ブギウギ・バンド）
演奏　T・Y・G
録音　尾杉　龍平
編集　川島　雄子
助監督　大上　典保
制作主任　久里　耕介
プロデューサー補　永井　正夫
監督助手　白石　宏一
撮影助手　高橋かづお　高山　永一
照明助手　大里　安雄　佐々木哲男
録音助手　江口　公雄
装飾　藤田　徹
小道具　野中　光悦
記録　吉田　栄子
ネガ編集　沼崎　梅子
編集助手　南　とめ
メイク　斉藤美津子　横銭　政幸

刺青　栩野　幸知
スチール　金子　哲也
車輛　長島　輝夫　関　賢一
制作助手　小林　秀夫
ロケ応援　牛越　信雄　森重　晃　並木　牧人　中田千恵子　杉江　義浩　永田　剛
東洋現像所
特殊映材社
日本照明
東京ビデオセンター
東京衣裳企画室
高津映画装飾
京阪商会
デンフィルムエフェクト
ヘロケ協力〉
東邦大学医学部
附属大森病院
附属大橋病院
東京女子医科大学附属第二病院
医療法人徳洲会
宇治徳洲会病院
茅ヶ崎徳洲会病院
日本赤十字医療センター
井の頭病院
第二足立病院
YMCA・京都府立医科大学「橘井寮」
茶房リバーバンク
〈協　力〉
サントリー株式会社
日産自動車
SUZUYA
青山アーストンボラージュ
日本コーバン
持田製薬
博愛社
フジモト株式会社
㈱高　研
㈱丸　善
㈱アイカ
「分裂病の少女の手記」
M・セシュエー著　村上仁・平野恵共訳　みすず書房刊
「緊急の場合は」J・ハドソン著　清水俊二訳　早川書房刊
「がんばれタブチくん」いいひさいち著　週刊漫画アクション
月刊ベストカーガイド　古書・新刊ミニコミ書肆ライブ
金子書房
秋田書店
ドクター劇団「さんし座」
劇団ひまわり

特別観賞券1,100円発売中

（当日　一般1,400円　学生1,200円　のところ）

今秋ロードショー

有楽町・日劇地階

日劇文化

TEL(201)2214

解　説

この映画は、大学病院での臨床実習（ポリ・クリ）を通して医術を身につけていく医学生たちの青春群像ドラマである。

とある医大の卒業を控えた、学生寮に住む主人公・荻野愛作を中心に、彼と同級の医学生たちをヨコ糸、学園紛争の生き残り組もいる寮生たちをタテ糸にそれぞれからませながら、臨床実習での珍奇な失敗談などを自ら京都府立医大生だった大森監督自身の体験を基に、医者とは？　医学とは？　と自問し苦悩する若者たちを描いていく。

主人公・荻野愛作に古尾谷雅人。同級生たちに光田昌弘、狩場勉、柄本明、西塚肇らの若手。そして紅一点に伊藤蘭。その他、小倉一郎、真喜志きさ子、ほか多くのゲスト陣が出演している。



ヒポクラテスとは…

ヒポクラテス（B.C.460頃～B.C.375頃）はギリシャの医学者で〈医学の父〉と称せられている。コス島の医師の家に生まれ、医を父に学び諸国をまわって見聞を広めた。鋭い批判と冷静な判断によって独自の体系を築き、ギリシャ医学を大成した。彼は医療の本質についての倫理的基礎を確立したといわれ、その精神は現代に至るまで光輝を放っている。





ポリ・クリとは…

医学部の最終学年六回生は、ポリ・クリと呼ばれる臨床実習にその一年が当てられる。６、７人に分けられたグループが、内科、外科、整形外科、小児科から、泌尿器科、耳鼻科、眼科等まで17ぐらいの科を、一週間ごとのローテーションでまわって行くのである。そこで、外来の診察、手術見学など、現在の病院で行なわれている様々な医療行為に初めて触れていく。

秋になると、六回生たちは、卒業後行なわれる医師国家試験の受験勉強に追われ始める。国家試験に合格し、更に二年間研修医として病院に勤務後初めて一人前の医者として扱われるわけである。

6人のヒポクラテスたち



●荻野式で愛を作る荻野愛作（古尾谷雅人）

名前が名前やから「避妊法」の試験はもちろん満点やった。実生活は分からんけど……。しかし、病院というのはおかしなとこやなあ。毎日、病院にいると自分が健康であることが不思議な気してくる。俺はまだ何科に進むか決めてへんのや。もっとも医者になれるという保証をもらった訳やないからね。

●男には興味なしの木村みどり（伊藤蘭）

男に負けるものかって一生懸命勉強してね、トップを争っちゃったりしてね。そのまま受験戦争に入って、とにかくってんで、受けたのが医学部よ。でもね、私、最近、人の生だとか、死だとかに携わる資格があるのかしらって考えることがあるのよ。皆はこんな事思ったこともないのかしら。そんなこといってももうじき卒業だから、ガンバラナクッチャ。



●なぜか31才の六回生 加藤健二（柄本明）

妻も子供もいるんですョ。他の５人は弟や妹みたいなもんですが、皆一生懸命やってますね。わたくしも彼らに負けないよう頑張ります。なにしろ親子４人、食べていかなきゃいけないですからね。妻よ、子供たちよ！お父さんはヤルヨー。



●親父のあとをついで…河本一郎（光田昌弘）

親父が医者なもんで、なんとはなく医大に進んだんやけど、最近になって本気で医者になろうと思うことが月に四回ぐらいあるんですョ。このまま親父の跡をつぐことになるんかな？残り少い学生生活やからもっともっとエンジョイしたいんやけど、何か面白いことないかな。





●ホンモノの医師になりたい 大島修（狩場勉）

現在、洛北医大六回生です。今日のポリ・クリは産婦人科だったんやけど、ほんまにいい勉強になりましたわ。もうこれで加藤さんにバカにされないで済みそうですわ。一日、一日、医者になる自信がついてくる感じです。早く本物の医者になって患者さんの役に立ちたいと思っています。さあ、来週は泌尿器科や、楽しみやなあ。

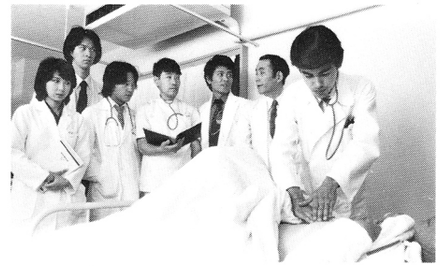
●ボク、阪神の王龍明（西塚肇）

本当は阪神タイガースに入って、野球選手として大活躍する予定だったんだけど、「阪神に王はいらん！」と言われ、今は洛北医大野球部キャプテンです。毎日のポリ・クリはあまり面白くないけど、仕方ないと思って適当にやってますわ。今の目標は、投げて、打って、走れる医者やからね。ちゃんと卒業して国家試験に受からんとね。



手塚治虫（小児科医）

映画監督という世界は三日やったらやめられないといいますから、大森さんの場合、医学と映画とどちらかを棒にふるとなると医者の方ではないかと思う。しかし医学を学んだということは、人のさまざまな生き方を患者や医者を通して見てきたということであり、映画という仕事に活かせる大きな財産になるだろう。僕自身も医者の漫画を描いていますが、人の生命の尊さを追求するのは分野が違っても一生続けなければならないことだと思う。



自切俳人（放射線科講師）

こんな映画にだけは出たくなかった、という気持ちと、この映画にだけは出たかったという気持ち、どちらも私の心にはある。医者になることには大変な問題がつきまとうのだが、そんな大変さなどどのような職業にもみられるものである。映画の中では次々と人が死んでいくのに、これは映画だから現実には誰も死んではいないのに違いない……。

しかし、白衣さえ身にまとえば誰でも医者に見える、という事実は〝映画だから〟ということによるものではないだろう。



軒上泊（内科助手）

前作の「オレンジロード急行」は私の村へはやってこなかった。加古川線は、鈍行と、快速が一日に二本走っているだけだから興味があったのだが。どうやら映画は大きく二つに分けられそうだ。この人口三千たらずの村辺りまで来る映画と、来ない映画の二種類だ。やってくる映画に観る気がしないものが多い。だから来ない方の映画に期待はしている。加古川線にだって青春はあるから、期待の中にはわりとよく切れる鈍器が隠されているとは思うが。　　（兵庫県 加東郡在住）

彼らのこの小さい世界

大森一樹［監督］

「当時インターンであったハーヴェイ・カッシングはマサチュウセッツ綜合病院をいみじくも『われらの、この小さい世界』と呼んでいる。たしかに小さい世界であり、たしかに『われらの』ものであった。その世界は医師の世界であって、患者のものではなかった。医師はこの世界の動かぬ存在であり、患者は来ては帰る浮き草であったのである」（マイクル・クライトン著『５人のカルテ』）

この映画は「この小さい世界」を背景とした人間たちの話であり、実をいえば、僕自身が、一年間そこの住人だったのである。しかし、医師でもなく患者でもなく、一人の医学生として身を置いていた僕にとって、その世界は、もちろん「われらの、この小さい世界」ではなかった。僕はその世界で、決して「動かぬ存在」ではなく、「来ては帰る浮き草」でもなかったのである。

自分がたかだか一年間見ただけの世界を、しかもホヤホヤのままで、このような型で映画にすることに、とまどいとためらいがなかったわけではない。何年かの時間をおいて見つめ直してからとも随分思った。しかし、「動かぬ存在」でもなく、「来ては帰る浮き草」でもなかった者としての目差しが、いつまでもそのようにあり続けることもまた困難なことではないか!?

そんな自問自答を繰り返しつつ、ようやくこの映画の一年六ヶ月に及ぶ旅が始まった。

シナリオを書いている間も、撮影をしている現場においても、僕がこだわり続けたのは僕が一年間関わった「この小さい世界」を、「僕の、この小さい世界」としてではなく、むろん「われらの、この小さい世界」としてでもなく、新たに構築していくことだった。

撮影は、手術室から便所に至るまで全て、本当の病院にカメラを持ち込んで行った。古尾谷君は、本当に胃カメラをのまされ、蘭ちゃんは本当に注射器で自分で自分の血を抜いた。決して本当らしさが欲しかっただけではない。僕も含めて全スタッフ、キャストが、まず容器としての「この世界」をもう一度確認することから始めたかったのだ。そして、彼ら個々が「この世界」での自分たちなりの気分をつかんだ上で、新しく「彼らの、この小さい世界」を創りあげてみたかったのだ。

「彼らの、この小さい世界」――「この小さい世界」が「大きい世界」の縮図だなどという気はサラサラないが、まぎれもなく「大きい世界」の一部分であることは確かだ。どちらも、同じ時代の中で、同時に成立しているのだから。だとしたら「この小さい世界」を具体的に見つめていくことが、「われらの、この大きい世界」が何であるかを知る一つのとっかかりになってほしいと思うのだが……。